

高松アーティスト・イン・レジデンス

活動記録集

2015 - 2025

Takamatsu Artist in Residence Documentation

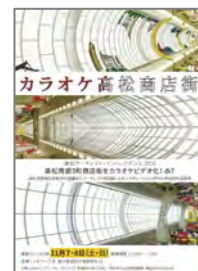
2015 年度（平成 27 年度）



F's Company p.3



ペピン結構設計 p.5



茂呂 毅 p.7

2016 年度（平成 28 年度）



黒田 大祐 p.9



ブルーエゴナク p.11



YORIKO p.13

2017 年度（平成 29 年度）



飯川 雄大 p.15



清水 宏 p.17



水谷 一 p.19

2018 年度（平成 30 年度）



アートチーム ODEN p.21



小野彩加 中澤陽
スペースノットブランク
p.23

2020 年度（令和 2 年度）



エレナ・トゥタッチコワ p.25



大島 亜佐子 p.27



杉原信幸 × 中村綾花 p.29

2023 年度（令和 5 年度）



安部良アトリエ+エレナ・トゥタッチコワ
p.31

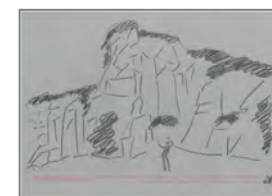


CHIHUAKO p.33



隣屋 p.35

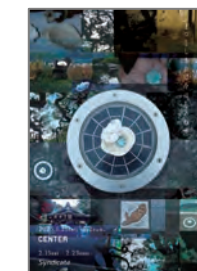
2024 年度（令和 6 年度）



岩本 象一 p.37



西村 涼 p.39



メラン カオリ p.41

「地域に飛び出したAIR」 次田 吉治（高松市創造都市推進局長） p.43

【凡例】

- ・作家名、イベント出演者の氏名・所属・肩書等は活動当時のものを記載した。
- ・滞在期間には移動日を含め、期間中に不在期間があった場合は「滞在開始日～滞在最終日 うち合計〇日間」と記載し、グループの場合は1人以上が滞在していた日数をカウントした。
- ・イベントは、実際の開催内容に基づいた情報を記載し、対象者及び定員は設定のある場合のみ、入場料等は有料の場合のみ記載した。



「ロード・オブ・三ぶた」



左上:「ここで生まれて」／右上・左下:稽古風景／右下:「夢の中」

●プロフィール

1997年に結成した長崎の劇団。「今の長崎」を捉え、そこに生きる人々を描き出す作品を作り続ける。

●滞在期間

2015 年 9 月 17 日(木)～2016 年 2 月 29 日(月)
うち合計 27 日間

●活動内容

「商店街でお店を出している方々の物語を描き、お店の人に興味を持ってもらい、人と街を繋ぐ」という企画意図のもと、商店街の店舗での聞き取り調査をもとに戯曲を執筆し、地元演劇関係者らの協力も得ながら上演した。

●学校アウトリーチ 物語を生み出す WS

2016 年 2 月 23 日(火)@香南小学校
2016 年 2 月 24 日(水)@鬼無小学校

●商店街劇場 Shopping Street Story

田町、トキワ街、南新町の商店街に生きる人たちを主人公にした物語を上演した。1公演につき3作品を上演。

2016 年 2 月 26 日(金)20:00～、22:00～
2 月 27 日(土)11:00～、15:00～、20:00～
2 月 28 日(日)13:00～、15:00～、17:00～
@春日ビル
入場料:1 公演 500 円
上演作品は右記のとおり。

【上演作品】「タイトル」店舗名(内容)

「ここで生まれて」
永森時計店 (商店街で生まれ育った永森さんの悲喜交々の物語)
出演:三嶋孝弥(株式劇団マエカブ)、谷口継夏(株式劇団マエカブ)
「夢の中」
ZOO どんぐり共和国 (移りゆく街に合わせた河合さんの生き方)
出演:宮本はるか(株式劇団マエカブ)、藤原由香里(半熟姉妹)
「バックステージ」
SHONLY (留学、帰国、開業。走り始めた田中さんのこれまでとこれから)
出演:田中俊亮(F's Company)、松本恵(F's Company)
「ロード・オブ・三ぶた」
三びきの子ぶた (美味しいものを届けたい野沢さんの想い)
出演:岩田千春(劇団FF)、多田依里子(株式劇団マエカブ)、田中俊亮(F's Company)
「両想いになる」
メガネのタナカヤ (若くして継いだ女社長の田中さんと街の姿)
出演:佐々木美栄子(劇団ボケティブプロジェクト)、黒澤見冴子(劇団NEO CLASSICS)、中川有紀子(パフォーマンスカンパニー リトルウイング)
「それは秘密」
グレコ (喫茶店で 38 年。八十川さんとご主人のお話)
出演:中崎千奈江(劇団わんかあとん)、藤井茂樹(パフォーマンスカンパニー リトルウイング)、伊賀千賀子(半熟姉妹)
「明日への戦い」
常磐町商店街振興組合 (店を畳み、商店街を支える組合で働く岡田さんの想い)
出演:橋本琢真(株式劇団マエカブ)、高橋寛栄(うちんく企画)、杉本恵子(フリー)
「つながりの糸」
大山メガネ (眼鏡屋さんでピーズ教室? 水野さんが思う仕事というもの)
出演:松本恵(F's Company)、中越恵美(劇団マグダレーナ)

●活動を振り返って

この企画に応募したのが、今から10年前。何気なく『滞在企画』という響きに惹かれて応募して、何気なく商店街と関わる事を考えた企画が、気がつけばこの10年の中で日本のあちこちで実施される企画になるとは、始めた時には想像も出来ませんでした。
『商店街劇場』と銘打ったこの企画は、その後、坂出市でも実施され、そこから僕の地元の長崎市や、茨城県の日立市・土浦市と実施されてきました。その土地の商店街の人々と出会い、様々な人々の想いに触れ、当初思い描いた通りの「人と人とを繋ぐ接着剤」になれたと思っています。
あの時、僕らのために必死に駆けずり回ってくれた高松市の担当者の方、快くこの企画に参加してくれた地元の演劇人の方々、そして何より僕らを受け入れてくれた田町・トキワ街・南新町の商店街の方々に大変感謝しています。本当にありがとうございました。

F's Company 代表 福田 修志



「パラダイス仏生山 2015」

●プロフィール

1999年結成。一貫して「場所」から立ち上がる作品づくりにこだわり、演劇からアートプロジェクトまで横断的に手がけている。

●滞在期間

2015年8月27日(木)～9月24日(木)
うち合計 20 日間

●活動内容

2014年にも仏生山で開催した演劇まちあるきを、アーティストの滞在・地元住民とのワークショップを経て新たに制作。
高松AIR参加後の2016年には別の住民たちと共に再創作した「パラダイス仏生山2016」を上演した。

●仏生山の記憶をたどる演劇まちあるき

「パラダイス仏生山 2015」

まちにまつわる記憶や物語をもとにつくられた演劇まちあるき。仏生山に住む人、働く人たちが物語の語り手となり、仏生山で暮らすなかで経験した話を、まちを歩きながら語った。

2015年9月20日(日)16時～
9月21日(月・祝)11時～、16時～
9月22日(火・祝)11時～、16時～
9月23日(水・祝)11時～

@仏生山町周域
(ちきり神社、仏生山温泉、カフェ・アジュール、
仏生山コミュニティセンター、仏生山商店街店舗 他)
前売 2,800 円／当日 3,300 円

主催：ペピン結構設計、仏生山まちプランニングルーム
助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団、
公益財団法人中條文化振興財団
特別協賛：アサヒビール株式会社
協力：仏生山地区コミュニティ協議会、
仏生山地区連合自治会、仏生山商工振興会



「パラダイス仏生山 2015」

●地域交流事業

仏生山に縁のある人で構成された出演者と、まちの活性化に取り組む任意団体「仏生山まちプランニングルーム」および町のボランティアに取り組む仏生山婦人会が演劇まちあるきを共同創作参加。リハーサルには健康促進のイベントとして地域の高齢者が参加。また、本番直前の通し稽古ともなり、リハーサル参加者からのフィードバックを作品へ反映した。

(2018年にはアーカイブ映像の上映会も実施した。)

2015年9月20日(日)11:00～13:30
@仏生山町周域
対象：仏生山婦人会

●活動を振り返って

2012年頃から仏生山に通い始め、2016年にプロジェクト完了とするまで足掛け5年。誰かに頼まれたわけでもなく、ただ「この、なんだかとても気になるまちで何かプロジェクトをやりたい!」という一念だけで押し掛けていった私たちを、仏生山の皆さんは温かく受け止めてくださいました。そしてパートナーになってくれた「仏生山まちプランニングルーム」さんをはじめ、地域の方々が私たちの期待をはるかに上回る情熱と「面白がり力」で共にプロジェクトを作り上げてくれました。本番も充実していたと思いますが、創作プロセスでは互いの人生が交差する奇跡のような瞬間がたくさんありました。

ペピン結構設計の代表作というだけでなく、私たちメンバーひとりひとりにとって生涯忘れることのできない豊かな時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。



「カラオケ高松商店街」展示風景

●プロフィール

1978年埼玉県生まれ。ブラウン大学卒業後、シカゴ美術館附属美術大学大学院修了。現在、サンタクララ大学教授。写真や映像を用いて文化的な物語を紐解く作品を制作、発表している。

●滞在期間

2015年9月14日(月)～11月10日(火)
合計58日間

●活動内容

高松南部商店街新世代協議会の協力のもと、商店街内の店舗に取材し、各店主との話し合いを重ねてカラオケビデオを制作し、成果発表展を開催。

●カラオケ高松商店街

商店街の風景を撮影したカラオケビデオ作品を展示。鑑賞者はビデオ作品の鑑賞に加え、歌唱も可能。

2015年11月7日(土)～11月8日(日)
12時～17時
@トキワー丁目

【アーティストトーク】

「カラオケ高松商店街」に至るまでの制作過程、過去の作品を紹介。

2015年11月7日(土)19時
@トキワー丁目



左下：映像撮影風景／その他：「カラオケ高松商店街」展示風景

●活動を振り返って

高松商店街店主の皆さんとカラオケビデオを制作し、商店街で公開する機会をいただきました。制作を通じて、店主さん一人ひとりの頑張りや苦勞、前向きな姿勢と責任感、そして商店街への深い思いに触れることができました。地域に根差して商いを続けてこられた方々の言葉や表情には、強さと温かさがありました。

この経験は、私にとって地域との関係性を大切にしたい作品作りの原点となっています。現在、在住している米サンフランシスコ市においても、高松AIRでの経験を活かしながら、その土地ならではの街や人々についての作品制作を続けています。今後も、地域に寄り添い、そこに生きる人々の声を作品に織り込んでいきたいと思っています。



「西をむいている 東にかたむいている」展示風景(《西風、はんぶん憂鬱》)

「西をむいている 東にかたむいている」展示風景(左上《西風、はんぶん憂鬱》／右上《YASHIMA1》／左下《影》／右下《ディアナの犬》)

●プロフィール

場のリサーチをベースに巨大なインスタレーションや映像作品を制作する美術家。
現在は黒田大スケの名で活動。

●滞在期間

2016 年 11 月 1 日(火)～2017 年 1 月 30 日(月)
うち合計 60 日間

●活動内容

リサーチ中に気づいた高松の風向きをテーマに作品を制作し、成果発表展を開催した。

●ワークショップ「といきのまち」

シルクスクリーンの技法を用い、インクの代わりに息を使って窓ガラスに街の絵を描き出した。

2017 年 1 月 9 日(月・祝)、14 日(土)各日 13 時～17 時
@高松市美術館
定員:各日 30 名程度

●成果発表展「西をむいている 東にかたむいている」

高松市内での滞在中に感じた風向きと、これによる街の影響と変化の気づきをもとに構成した展覧会。市内で制作された映像作品と扇風機によるインスタレーション《西風、はんぶん憂鬱》などを展示。

(会場 1)
高松市中央卸売市場 加工水産物棟南側
2017 年 1 月 20 日(金)～29 日(日)11 時～17 時
(1 月 28 日(土)のみ市場特別開放のため 8 時～17 時)

(会場 2)
瓦町 FLAG 8 階 アートステーション ギャラリー
2017 年 1 月 20 日(金)～29 日(日)10 時～21 時

●活動を振り返って

あの時、私は毎日、平坦に陰影なく整えられた街の中から、ある気配を、影を探すために自転車で走り回った。そしてそれは、うどん屋からうどん屋への道のりと重なるものでもあった。

今にして思えば、なぜ、うどん(濡れた大理石のような美しい造形)について、あるいはその原料である小麦について注目しなかったのか?それが私を(本当の意味で)形作るという意味でも、夢中になれるという意味でも他人事では決してなかったのに。

しかしながら、私はそうしなかった。それよりも、その時は、もっと直接的な、街に隠された戦争の気配を、影を見つめることに夢中だった。

それは、うどん(喜び)とは反対の恐怖に急かされた抗いがたい衝動によるものであった。



「まほうは消えない。」撮影:西川博喜

「まほうは消えない。」撮影:西川博喜

●プロフィール

穴迫信一を中心に北九州を活動拠点とした劇団として2012年に結成。北九州と京都の二都市を拠点に、普遍的かつ革新的な演劇作品の創作をコンセプトに活動。

●滞在期間

2016年9月20日(火)～2017年2月15日(水)
うち合計20日間

●活動内容

商店街にあるさまざまな店舗に取材した内容をもとに制作した演劇を、14件の店舗と商店街や駅前の広場で上演。

●商店街探索劇「まほうは消えない。」

街頭やお店を舞台にした演劇を上演。

@商店街:

2017年2月11日(土・祝)11時、14時、17時

@JR高松駅前:

2017年2月12日(日)13時、16時30分

出演:

木村健二(飛ぶ劇場)、高野由紀子(演劇関係いすと校舎)、
荒木宏志(劇団ヒロシ軍)、平嶋恵璃香(ブルーエゴナク)、
中越恵美(劇団マダレーナ)、横関亜梨沙(サラダボール)

取材協力店舗:

【南新町】フルヤマ、フルーツ大林、永森時計店、ますや雲湧堂、
Fujiya、Ikedaya、春風堂

【田町】カフェグレコ、川淵帽子店、レディースショップいずみ、
としの花屋

【トキワ街】味楽、Farmer's Shop、三びきの子ぶた

制作協力:シアター・デザイン・カンパニー

●地域交流事業(ワークショップ・公演)

香川県内の高校の演劇部の生徒と俳優が混ざり、身体を動かすコミュニケーションや、演技の上で大切なことを伝えるためのゲームを行った後、参加した高校生へ「まほうは消えない。」をワークショップバージョンにして上演。

2017年2月13日(月)

@瓦町FLAG 8階 アートステーション 多目的スタジオ

●活動を振り返って

本作は2017年2月、私が演劇活動を始めてちょうど5年くらいの頃に制作しました。当時の私は滞在制作の経験も浅く、上演にたどり着くまで多くの方にお世話になったことを改めて思い起こします。とりわけシアター・デザイン・カンパニーの皆様には大変お世話になりました。

本創作では、瓦町の商店街に並ぶ店舗の方へ取材を行い、そこで聞いたお話をもとに戯曲を執筆しました。

一軒ずつ各店舗へご挨拶に伺い、様々な反応を受け止めながら制作を進めていきました。

当初は受け入れられない空気を感じる場面もありましたが、たどたどしくも会話を続けていく内に、店主の皆さまから様々なまちの記憶をお話いただきました。

私は、これまでいくつかの滞在制作を行ってききましたが「演劇」がまちに受け入れられていくプロセスを初めて身をもって体験したのは高松AIRかもしれません。

それから今日まで幾度か高松を訪れるたびに「瓦町駅周辺のあのあたり」を歩き、変化していく風景とともに今積み重なり続ける歴史を、当時の記憶と照らし合わせながら感じています。



「高松私立おやこ小学校」教室



左上:「高松私立おやこ小学校」外観/右上・左下:「高松私立おやこ小学校」の様子/右下:参加者たち

●プロフィール

グラフィックデザインと空間演出の仕事をする一方で、国内外のさまざまな地域に滞在しながら地域住民と協同するコミュニティアートプロジェクトに取り組む。

●滞在期間

2016年8月31日(水)～12月8日(木)
うち合計 65 日間

●活動内容

空き店舗を教室として改装し、「高松私立おやこ小学校」やスピンオフ企画を開催した。

●高松私立おやこ小学校

さまざまな専門家を講師として迎え、算数／理科／社会／国語から派生し、「親子」をテーマにした授業を開催。参加する親子は「同級生」として同じ立場で共同作業に取り組んだ。

2016年11月5日(土)～12月4日(日)の土・日
(12月3日(土)を除く)
1週目【算数】講師:金川悟(元高校数学教師)、馬場昌宏(中学校数学教師)
2週目【理科】講師:畑本耕一(柔道整復師)
3週目【社会】講師:水津繁美(スイズカメラ店主)
4週目【国語】講師:宮島朋宏(俳優)
5週目【クリスマス会、卒業式]
@仏生山コミュニティセンター前の建物
対象:小学1～6年生とその保護者(親族であれば誰でも可)
定員:20組程度(3回以上授業に参加が条件)
参加費:1組につき1回800円(12月4日(日)は無料)

●おやこ小学校スピンオフ企画“おとな小学校”

ゲストとのトークセッションや、おやこ小学校の報告会、ゲストによるライブパフォーマンスなどを行った。

2016年12月3日(土)
@仏生山コミュニティセンター前の建物
対象:おやこ小学校生徒、地元住民など
ゲスト:宮脇慎太郎(写真家)、東賢次郎(ギタリスト兼小説家)

●活動を振り返って

この「たかまつおやこ小学校」は自分の中でかけがえのない、一生ものの宝物となりました。
地域に入り、やりたい!と思ったことを全て詰め込んで実施した数ヶ月。
仏生山の町でお世話になった方々とは今でも仲良く、東京と香川を行き来して一緒に旅行をする関係が続いています。

そしておやこ小学校はこの高松AIRの後も継続することになり、2019年には東京都にて「東アジア文化都市」の企画の一貫として、その後豊島区の劇場「あうるすぽっと」「東京芸術劇場」にて2024年まで開催をいたしました。2022年からは静岡県舞台芸術センター「SPAC」さんに企画を引き継いでいただき、静岡県内の各所にて開催しています。

主催の高松市文化振興課様、仏生山の皆様、関わっていただいた全ての方々に心から感謝をいたします。



「デコレータークラブ 衝動とその周辺にあるもの」展示風景



左上・左下:「デコレータークラブ 衝動とその周辺にあるもの」展示風景／右上:制作風景／右下:アーティストトーク1

●プロフィール

時間の相対性や人間の知覚のゆらぎなどをテーマとし、映像、写真、立体などを用いた作品制作で精力的に活動する。

●滞在期間

2017年9月2日(土)～12月30日(土)
うち合計 57 日間

●活動内容

滞在中にドローイングや地域の人が出演する映像作品を制作し、インスタレーションによる展覧会を開催。

●成果発表展

「デコレータークラブ 衝動とその周辺にあるもの」
「デコレータークラブ」シリーズの映像やインスタレーションを展示。

2017年12月14日(木)～12月25日(月) 12時～18時
@高松シンボルタワー マリタイムプラザ高松 2 階

【アーティストトーク 1「衝動とその周辺にあるもの」】

これまでの制作や作品について。

2017年12月16日(土)16時30分～18時
聞き手: 正路佐知子 (福岡市美術館学芸員)
定員: 30 名

【アーティストトーク 2「デコレータークラブの話」】

塩屋町(神戸)の活動紹介と、そこで飯川が行ったプロジェクト「衝動とその周辺にあるもの」について。

日時: 2017年12月24日(日)16時～17時30分
聞き手: 森本アリ (音楽家・旧グッゲンハイム邸管理人)

【ワークショップ

「シンボルタワーで四コマ漫画を描くぞ!」
オリジナルの四コマ漫画の特訓ノートを使い、四コマ漫画を完成させた。

2017年12月17日(日)13時30分～16時30分 随時
所要時間 30 分～
講師: 飯川雄大、藤井佳之 (なタ書店長)

●活動を振り返って

前年度の滞在作家の黒田さんが「高松はね、風が逆から吹きますよ」と言っていた。どういうこと? 滞在場所見つけな、どんな作品作ろ、会場探そ、サンポート! いつ展覧会しよ、作ろ、イベント企画せな、チラシできた、発送した、お金足りる? 会場当番もしな、休みの日作ればよかった。神戸から森本さん、福岡から正路さんがトークに来てくれて《デコレータークラブ》の話をした。滞在作家の水谷さん、高松在住の矢野さん、先生の中川さん、高校生カメラマン田中くん、多くの人に協力してもらった展覧会。本屋の藤井さんとのワークショップが特に楽しかった。高松市美の人はたぶん全員見に来てくれて、2020年の同館個展につながった。そこで初めて作った作品《0人もしくは1人以上の観客に向けて》が2021年の千葉市美個展につながり、一昨年その作品が高松市美に収蔵された、今年はその作品を水戸芸術館でも展示します。かなり運いいなと思います。



「清水宏のひとり大河ドラマ 仁義なき水戦争～高松死闘編」

●プロフィール

1980～90年代にかけて「劇団山の手事情社」の中心的俳優として活躍。在団中よりピン芸人としても活動開始。2011年からは英語での活動を始め、日本スタンダップコメディ協会を設立。

●滞在期間

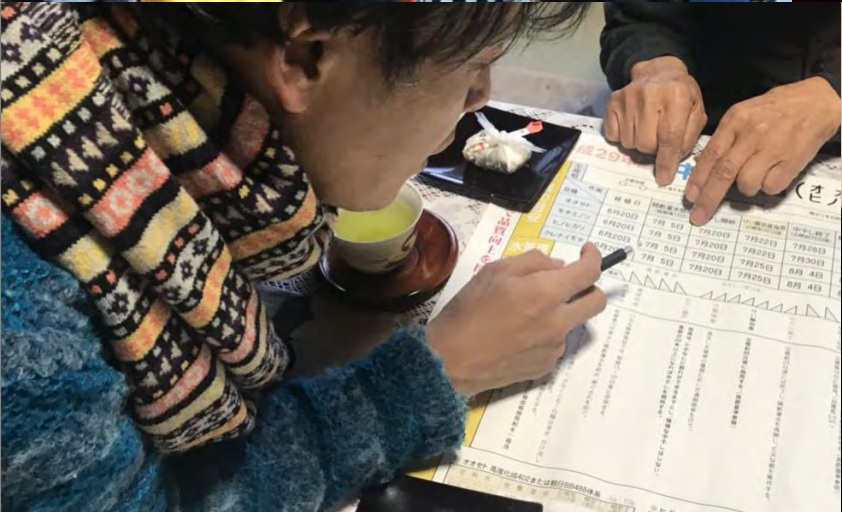
2017年12月26日(火)～2018年2月28日(水)
うち合計 22 日間

●活動内容

「水不足／高松砂漠」をテーマに50人以上の市民から話を聞くなどのリサーチを行い、公演を制作した。

●ワークショップ

絵本「おいしいのぼうけん」を元にした読み聞かせパフォーマンスを行い、子どもたちと「夢の機関車をつくる」ワークを行った。
2018年1月10日(水)
@高松市立林幼稚園、高松市立田井幼稚園
対象:各幼稚園児



左上:ワークショップ風景／右上:「清水宏のひとり大河ドラマ 仁義なき水戦争～高松死闘編」／左下:リサーチ風景／右下:ポストパフォーマンストーク風景

●清水宏のひとり大河ドラマ

仁義なき水戦争～高松死闘編

リサーチ内容をもとに高松の「水不足／高松砂漠」をテーマにしたスタンダップコメディ(漫談)
2018年2月27日(火)19時～
2月28日(水)14時～、19時～
@瓦町FLAG 8階 アートステーション 多目的スタジオ
入場料:一般 1,000 円、高校生以下 500 円

【ポストパフォーマンストーク】

2018年2月27日(火)の公演後
@瓦町 FLAG 8 階 アートステーション 多目的スタジオ
出演:安田雅弘(劇団山の手事情社主宰・演出家)、
清水宏

●活動を振り返って

昭和48年の歴史的な水不足であった「高松砂漠」を題材に、『清水宏のひとり大河ドラマ 仁義なき水戦争～高松死闘編』を制作しました。計3週間、多くの高松市民に取材し、困難の中でこそ見える“人間の顔”や“ユーモアの力”に触れ、作品の核が生まれました。
スタンダップコメディ・演劇・朗読・落語など、これまで培った表現を総動員した「人間群像コメディ」として瓦町FLAGで上演。水不足という苦しい時節を生きた当時のひとびとの、そして今の高松の人たちの悲喜こもごもを描く、愛と憎しみの人間賛歌コメディとして披露することができました。
高松市民の皆さんの協力と温かな歓迎に支えられ、高松でしか生まれない作品となりました。この経験は私の表現活動における大きな財産です。



「表現と光」展示風景 撮影：田中美句登

左上：ギャラリートーク風景／左下：講演会風景／右上：「表現と光」展示風景 撮影：田中美句登／右下：制作現場見学会風景

●プロフィール

アーティスト。ドローイングやフィールドワークを起点とし、様々なメディアや方法を通じてサイト・スペシフィックかつタイム・スペシフィックな芸術実践を行う。

●滞在期間

2017 年 11 月 2 日(木)～2018 年 1 月 20 日(土)
合計 80 日間

●活動内容

高松市中央卸売市場における滞在制作及び、成果発表展開催のほか、美術教育現場との交流イベントの実施。

●中高生を対象とする制作現場見学会

地元の中高生を制作現場に招いた見学会の実施。

11 月 22 日(水)香川県立高松工芸高等学校美術科 1 年生
11 月 24 日(金)香川県立高松工芸高等学校美術科 2・3 年生
12 月 28 日(木)高松市立紫雲中学校美術部

●講演会「表現と光」

香川県立高松工芸高等学校美術科生徒を対象として、活動を紹介するとともにその基底となる考え方についてスライドトークを実施。

2017 年 12 月 14 日(木)@香川県立高松工芸高等学校

●成果発表展「表現と光」

かつて倉庫だった会場に、木炭で描線を刻まれた起伏のある紙の造形によるインスタレーションを展開。

2018 年 1 月 5 日(金)～1 月 11 日(木)
11 時 30 分～16 時 30 分
@高松市中央卸売市場 加工水産物棟 3 階

●ギャラリートーク

展覧会期間中毎日 13 時 30 分～
ゲスト：1 月 6 日(土) 牧野裕二(高松市美術館学芸員・主査)
1 月 7 日(日) 橘美貴(高松市美術館学芸員)
1 月 8 日(月・祝) 福田千恵(高松市美術館学芸員)
1 月 9 日(火) 毛利直子(高松市美術館学芸員・係長)
1 月 10 日(水) 橋本こずえ(兵庫県立美術館学芸員)

●トークイベント

「これから美術と名指される(かも知れない)何か
ー美術教育の現場における美術とアーティスト・イン・レジデンスー」
アーティストとして活躍すると同時に教育者として美術教育の現場に立つゲスト3名を迎え、水谷とゲスト3名の活動を紹介しながら、これから美術と新しく名指される(かも知れない)ものについて語るトークイベントを開催。

2018 年 1 月 6 日(土)16 時～18 時 30 分
@瓦町 FLAG 8 階
定員：150 名
ゲスト：
藏本秀彦(アーティスト、香川県立高松工芸高等学校 美術科 教諭)
三村昌道(アーティスト、香川県立高松工芸高等学校 美術科 教諭)
土屋貴哉(アーティスト、国立大学法人佐賀大学 芸術地域デザイン学部 准教授)

●活動を振り返って

瀬戸内海に面した海辺の市場、高松市中央卸売市場。その加工水産物棟3階、横幅15メートル、奥行き37メートルの大空間。季節は冬。床も壁も冷たく、静かで、時間は止まって見えた。

早朝にはアオサギが居る。いつも1羽。すりガラスの向こうであったかそうな太陽を浴び、ぴくりとも動かない。物思いに耽っているようにも、何も考えていないようにも見えた。そうして再び時間は止まり、羽繕いを始めてまた動き出す。

毎日、朝から私は防寒のため3枚の作業ズボンを重ね穿き、膝を折って座布団に座り込む。前屈みに。意識を作業に浸してゆく。

俯いている間にも窓からの光は表情を変え、顔を上げるたびに知らない景色が現れた。その都度その美しさに私の心臓は掴まれる。何もかもが美しい。毎日が美しく、全ての瞬間は美しかった。



「島はいぶう」(屋島)

左上:「はいぶう」/右上:「新生物『はいぶう』を育てる」会場風景/左下:ワークショップ風景/右下:「島はいぶう」(大島)

●プロフィール

各メンバーの個性を活かし、おでんの具のように全員で練り上げた作品を制作・発表している5人組のアートチーム。“廃材”と呼ばれる古着や工業廃棄物等を作品の材料にすることで、社会的な問題をPOPなアート作品に変えてポジティブに表現する。

●滞在期間

2018年11月11日(日)～11月28日(水)
合計18日間

●活動内容

地域で集めた廃材を使って新生物「はいぶう」を参加型公開制作で制作し、インスタレーションを展開。

●ODENハイザイ研究所

「新生物『はいぶう』を育てる」

様々な廃材を種に、その土地の土や水、風をうけ、いろいろな形に育つ新生物「はいぶう」をモチーフに、空き店舗スペースにて、自由に参加できる公開制作とワークショップを開催。

2018年11月19日(月)～25日(日)
@高松シンボルタワー マリタイムプラザ高松 2階

【公開制作 ～アートチームODENと一緒に廃材をつかって新生物『はいぶう』を育てよう～】

基本の型にマジックテープ等で、参加者とともに廃材を貼り付けて「船はいぶう」や「島はいぶう」などの作品を作った。

2018年11月19日(月)～23日(金・祝)
@高松シンボルタワー マリタイムプラザ高松 2階

【ワークショップ くっつく『ミニはいぶう』を作ろう！！】

持ち帰れる『ミニはいぶう』を制作した。

2018年11月23日(金・祝)～25日(日)
@高松シンボルタワー マリタイムプラザ高松 2階
参加費:500円

●活動を振り返って

2018年、高松市でのアーティスト・イン・レジデンスでは、瀬戸内海に浮かぶ島々を巡りながら、地域の方々と出会い、土地の記憶や暮らしのリズムに触れる大切な時間を過ごしました。島ごとに異なる風景や文化、人々の語りが作品づくりの大きな力となり、取材や観光では得られない深いつながりが生まれました。

特に、地域の方から集められた廃材には色んな思い出があり、創作が地域と響き合う感覚を強く感じました。海を渡るたびに、人と場所のつながりが少しずつ広がり、その関係を作品として形にしていけることができました。

この経験は、アートが地域と共に生きることの意味を改めて考えるきっかけとなり、今の活動を支える大切な土台となっています。



「原風景」での上演風景 撮影:Yuka Kunihiro



左上・右下:「原風景」での上演風景／右上・左下:「原風景」展示風景 撮影(全て):Yuka Kunihiro

●プロフィール

東京を拠点に舞台芸術作品の制作を中心に活動を展開する、2人組の舞台作家・小野彩加と中澤陽によるコレクティブ。舞台芸術の既成概念と、独自に研究開発する新しいメカニズムを統合して用いることで、現代における舞台芸術の在り方を探究する。

●滞在期間

2018 年 11 月 5 日(月)～12 月 24 日(月)
合計 50 日間

●活動内容

市内の人々にこれまでに見た風景の記録としての写真を収集し、それにまつわる話を聞き取り、写真とテキストで展示を構成し、上演を実施した。

●ワークショップ

「記録と記憶の風景を共有してひとつの作品を作る」
参加者が持ち寄った写真の撮影場所をひとつの紙にそれぞれ書き加え、「外在と内在の風景の共有」として制作するワークショップを実施した。

2018 年 12 月 2 日(日)13 時～16 時
@高松市美術館 講座室 2 定員:20 名程度

●成果発表展「原風景」

リサーチで集めた写真や聞き取りしたテキストをもとにした作品展示、集めた作品を上演台本とした舞台の上演を実施した。

展示:2018 年 12 月 18 日(火)～22 日(土)
9 時 30 分～17 時(最終日は 14 時まで)
上演:2018 年 12 月 20 日(木)18 時 30 分～
12 月 21 日(金)18 時 30 分～
12 月 22 日(土)15 時 30 分～
@高松市美術館 講堂
出演:西井裕美 演出:小野彩加 中澤陽
協力:24EP パナソニック映像株式会社

【オープニング・アーティストトーク】

滞在制作を行なった小野彩加、中澤陽および上演出演者の西井裕美によるトーク。

2018 年 12 月 18 日(火)16 時～
@高松市美術館 講堂
出演:小野彩加 中澤陽 西井裕美

【ポストパフォーマンストーク】

2018 年 12 月 20 日(木)18 時 30 分上演終了後～
@高松市美術館 講堂
出演:小野彩加 中澤陽 西井裕美

●活動を振り返って

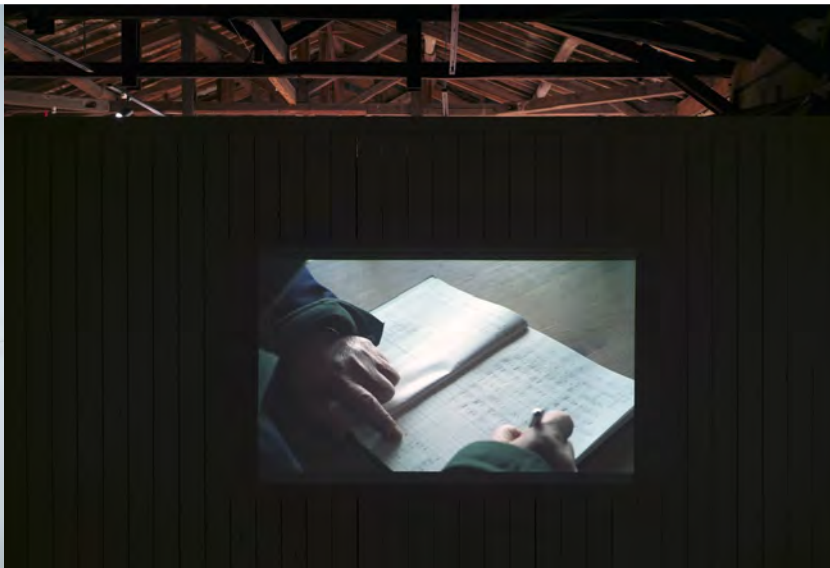
2018 年の高松アーティスト・イン・レジデンスでは、49 日間の活動を通して『原風景』という作品を制作した。

高松という土地を歩き、市民の方々の記録と記憶をもとに、写真(最終的には、それぞれが創った何らかの「作品」にまで及ぶ)・言葉・舞台を横断する新しい形の表現を試みた。滞在制作という形式が、作品に関わる人々と時間を共有しながら、「現前」という主題をより具体的に感じさせてくれた。

外から訪れた私たちにとって、この土地で交わった視線や声は、今も活動の根底に流れ続けている。あの時に見えた「風景」は、作品を創り続ける上でのひとつの原点となった。



「風の日には島を歩く | Days With the Wind」(Ⅱ. 島の道を辿るための詩の展示) 展示風景



「風の日には島を歩く | Days With the Wind」展示風景(左上・右上(Ⅰ. 海のアトリエでの展覧会)／左下・右下(Ⅱ. 島の道を辿るための詩の展示))

●プロフィール

1984年、ロシア、モスクワ生まれ、京都市在住。モスクワでクラシック音楽や日本の文学、文化史を学んだ後、2012年より日本へ渡る。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。
人間としていかに世界を知覚し想像できるかを問いながら、歩き、考え、経験したことを絵画やドローイング、セラミック、言葉、映像、写真などの作品を通して表現する。

●滞在期間

2020 年 12 月 5 日(土)～2021 年 2 月 28 日(日)
うち合計 51 日間

●活動内容

女木島と男木島についてリサーチを経て、女木島にて、鑑賞者自身が能動的に土地を辿りながら知ろうとする展覧会を開催。

●「風の日には島を歩く | Days With the Wind」展

「Ⅰ. 海のアトリエでの展覧会」と「Ⅱ. 島の道を辿るための詩の展示」の二部構成による展覧会。

【Ⅰ. 海のアトリエでの展覧会】

女木島で制作した映像や写真作品のほか、女木島と男木島の島民の物語を集めた冊子や、島の形を描いたスケッチブックなどを展示。季節風「オトシ」を題材にした映像作品「風の島」には、島民3名が出演した。

2021 年 2 月 14 日(日)～28 日(日)の金土日
10 時 30 分～16 時 30 分
@松風(女木島島内)

【Ⅱ. 島の道を辿るための詩の展示】

鑑賞者自身が、女木島の特徴的な5カ所のロケーションに設置した木箱から詩が書かれたハガキを取って読み、次の場所へ歩く野外展示。島とはどんな場所か、風景に耳を澄ませながら、ゆっくりと島を辿る展示。

2021 年 2 月 14 日(日)～28 日(日)
@女木島島内 5 カ所

●活動を振り返って

高松から一番近い島、女木島を訪れたのは、静かな冬で、世界が閉じていくコロナの最中だった。島の人々に受け入れてもらい、海沿いのアトリエを借りて、数週間島で暮らし制作した。
島は、海から見ると、角度によって形が変化していく、いくつもの形を持つような不思議な場所だ。隣の島とも、距離が近くても、人の雰囲気、人間同士の関わり方、風習も違って、それでも人同士、島同士は、血が繋がっている親戚のように、どこか同じ物語を共有している。
島は歩いていくと、呼吸している生き物のように感じる。冬の女木島は、天気が変わりやすく、同じ日に晴れから曇り、雪に変わって、見る見るうちに、霧に包まれ、周りの島々も視界から消えて、また現れる。
島を自由に横断する季節風とともに歩いて一周すると、潮の満ち引きで現れては消える道のように、世界の境界線は動き、人の物語、島の物語を集めながら、想像の中でわたしも、海を移動する一つの島になっていった。



「ちょんまいさん～たかまつまのえほん～」一部

●プロフィール

「縫い絵®」という手法で作品制作と展示活動、ワークショップなどを開催。絵本製作のほか、NHKや企業広告のアニメーションなどを手掛ける。

●滞在期間

2021 年 1 月 20 日(水)～2 月 28 日(日)
合計 40 日間

●活動内容

高松で暮らす人を対象に滞在開始前に実施したアンケートから、高松での何気ない日常などを「原石」として集め、滞在中のリサーチで深めて「まのえほん」を製作した。

●「まのえほん」原石探しアンケート

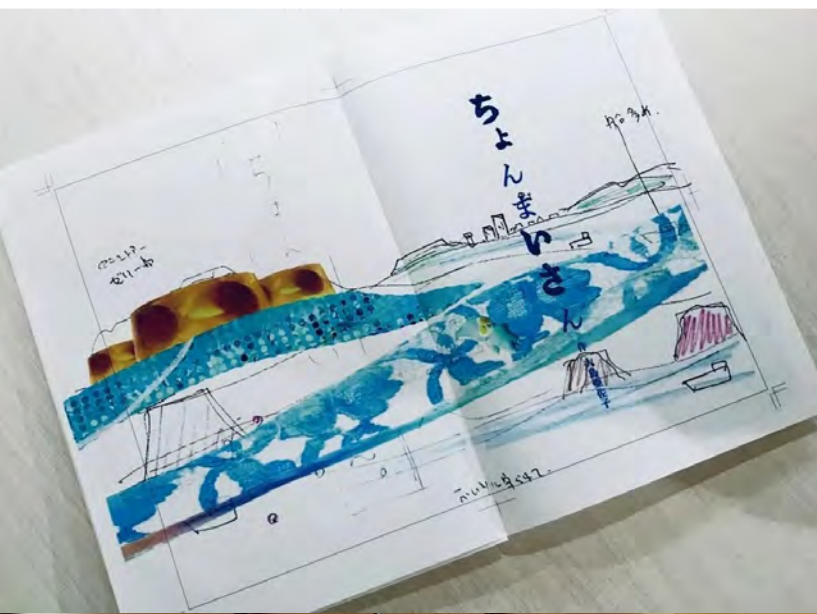
アンケート用紙やオンラインで「まのえほん」のストーリー、キーワード、キャラクター作りに繋がるアイデアを収集。

募集期間:2020 年 12 月～2021 年 1 月 20 日頃

●縫い絵ワークショップ

15 cm 四方のキャンバスにさまざまな素材や画材を使って自由なアイデアで作品を仕上げた。

2021 年 2 月 6 日(土)、2 月 13 日(土)
各日 13 時～15 時
@We Base 高松 ビジネスラウンジ
定員:各回 10 名
参加費:2,000 円



左上:制作風景/右上:「ちょんまいさん～たかまつまのえほん～」原稿/左下:ワークショップで参加者が作った作品/右下:ワークショップ風景

●「ちょんまいさん～たかまつまのえほん～」発刊

瀬戸内海から生まれた子というイメージでデザインされた主人公「ちょんまいさん」が市内各所を訪れる。作中にはワークショップでの作品も用いられ、文は讃岐の方言で構成された。

仕様:B5 版 オールカラー24 頁
価格:880 円+税
販売場所:お披露目会会場のほか、市内や県外の書店等

●「ちょんまいさん～たかまつまのえほん～」

完成お披露目会

絵本の原画やキャラクターデザイン、登場するぬいぐるみなどを展示。

2021 年 2 月 27 日(土)、28 日(日)13 時～16 時
@We Base 高松 ビジネスラウンジ

●活動を振り返って

アーティスト・イン・レジデンスという暮らしながら作品制作できる機会をいただけたこと、高松の町の皆さんに助けてもらって、楽しい瞬間をいただいて、今振り返ってもあの日々は特別な時間だったなあと思わしています。

制作からもう数年経ちましたが「この本持っています」といった嬉しいお声をいただくこともあり、色々な人のところへ迎え入れてもらった「ちょんまいさん」たちが元気であるんだなあと思うと嬉しくなります。

絵本は、ご自身のペースで物語の時間を楽しむことができる身近なアートです。そして展覧会などで展示される作品のように時間や場所を限定しないアートでもあります。ということはこれから先もどこかでこの本に出会うことができるかもしれない。

息の長いアートになれるかもしれません。



公開制作・ワークショップで制作した襦袢の炬燵布団

●プロフィール

生活と結びつく手仕事を行う帽子作家の中村綾花と、土地の記憶の欠片を繋ぎ合わせることで、土地に宿る形を造形し、その創作から生まれる身体によるパフォーマンスを行う杉原信幸のユニット。

●滞在期間

2020年12月24日(木)～2021年2月27日(土)
合計 66 日間

●活動内容

民俗に関するリサーチをし、そのなかで入手した木を使った獅子頭を制作。また、参加型公開制作では参加者とともに約3週間かけて襦袢の炬燵布団を制作した。

●公開制作・ワークショップ「襦袢の炬燵、ゆたん」

市内で集めた古い浴衣や着物、旗などを縫い合わせて大きな襦袢の炬燵布団を作る公開制作・ワークショップ。

2021年2月1日(月)～2月23日(火・祝)11時～19時 不定休
@紺屋町コトマスはなれ

●杉原信幸 × 中村綾花トーク

作家によるトーク。

2021年2月14日(日)19時～21時
@紺屋町コトマス
定員:15名
参加費:1,500円(ワンドリンク付)



左上・右下:「安土早紀子こたつライブ」こたつ仕舞の儀式・原始感覚獅子舞」風景／右上:公開制作・ワークショップで制作した襦袢の炬燵布団／左下:ワークショップ風景

●安土早紀子こたつライブ

こたつ仕舞の儀式+原始感覚獅子舞

志々島を拠点に活動する音楽家安土早紀子によるライブのほか、炬燵仕舞の儀式を行い、炬燵布団をゆたんとして纏った獅子舞を披露。

2021年2月23日(火・祝)14時～
@紺屋町コトマスはなれ
出演:安土早紀子(歌、笛、太鼓、獅子舞)、佐々きみ菜(獅子舞)、佐藤啓(獅子舞)、杉原信幸(獅子舞、太鼓)、中村綾花(獅子舞)
ゲスト:水野一典(鉦)、小野正人(太鼓)

●活動を振り返って

不要な着物を集めて、土地の人と刺し子のワークショップを行い、こたつ布団を縫い、そのこたつ布団が獅子舞として動き出す即興舞を行うというプロジェクトを初めて行った2020年はコロナ禍であった。商店街の空き店舗を借りて、そこに住み込み、リサーチに出かける時以外、朝から晩までワークショップを行った。感染症対策を施した上で、こたつに入り、手縫いしながらお茶を飲んで色んな話をすることで、コロナ禍で希薄になった人との繋がりや場所がとても求められていると感じた。特に家族を持たない独り身の人たちが常連となって集い、裁縫の上手な女性から飲み屋帰りのおじさんまで、さまざまな縫い跡が集まることで、個の表現を超えた存在が宿り、それに動かされるように無病息災を祈り、舞う体験は、コロナ禍に生まれた自身の重要な活動となった。



ワークショップで制作した「島図鑑」



左上:「島の道をつくる」風景／右上:「Playground: An Island | プレイグラウンド-島の遊び」展示風景／左下:「島図鑑」一部／右下:エレナ・トゥタッチコワと島の住民による作品

●プロフィール

瀬戸内国際芸術祭2010の参加作品「島キッチン」を豊島で発表し、男木島集落における空き家と移住の調査や、地域活性プロジェクトの企画・運営を継続してきた安部良アトリエと、高松アーティスト・イン・レジデンス2020に参加したエレナ・トゥタッチコワによるコラボレーション。

●滞在期間

2023年10月2日(月)～2024年2月5日(月)
うち合計 28日間

●活動内容

男木島での滞在中、島の住民、特に子供たちとの交流をしながら、土地や文化のリサーチを行い、各イベントや成果発表展を開催した。

●二日間の集中ワークショップ「島図鑑を作る」

男木島とはどんな島か、暮らすこと、探検すること、島を想像することとは何かを、男木島の人たちと一緒に島内を探検し、考えて「島図鑑」として形にした。

2023年11月25日(土)11時～14時30分、
11月26日(日)13時～16時
対象:小学生以上で両日参加可能な方
定員:5名

●ワークショップ「島の道をつくる」

島で採取した材料で杖を作り、昔から男木島で大切にされていたものの、今では藪に覆われ見えなくなった荒神林(コジバシ)と呼ばれる杜であり道である場所を歩く。

2023年12月23日(土)13時～14時45分
対象:小学生～大人(未就学児の見学可能)
定員:20名

●成果発表展

「Playground: An Island | プレイグラウンド-島の遊び」
男木島の住民とともに制作した作品やエレナ・トゥタッチコワが男木島の風景を描いた作品などを展示。

2024年1月27日(土)～2月4日(日)
13時～16時30分(1月29日(月)～31日(水)は休)
@男木島図書館

【男木島の“家”と“ひと”を巡る会】

島の空き家の増加・利活用等について、安部良が案内。
2024年1月28日(日)9時30分～
@男木島図書館 定員:10名

【トークセッション】

エレナ・トゥタッチコワと安部良アトリエによるトーク。
2024年1月28日(日)15時～16時 @鞆と本(男木島島内)

【島を一周して歩く会】

エレナ・トゥタッチコワとともに男木島を歩いて一周した。
2024年2月4日(日)11時～14時 定員:10名

●活動を振り返って

2020年の女木島での滞在制作をきっかけに、隣の男木島にも興味を持ち、島に通い始めたトゥタッチコワの呼びかけで、男木島と長年関わりを持つ安部良アトリエとの協働が始まった。ワークショップや展覧会を開催し、島民、隣の島の人、移住を考える人、旅人など、様々な人と関わりながら、島とはどんな場所かを、共に考えた。

島の子どもたちと歩き、絵を描き、釣りをして、踊り、毎日のように遊んだ。また、島の外から男木島がどう見えるかを考えるために、日本の各地から手紙を募集し、島の人々と話し合いもした。かつてあった集落や道の跡を辿り、島の新しい地図を描き、島を探検した。島という、海に囲まれた限られた土地をめぐり、様々な人や文化が行き交っている。この場所で創造することで、今を生きることは何かを考える機会になっただろう。



ワークショップ風景



左上・右上:「イトヨリつむぐ momento」展示風景／左下:「ちうあこ横付け自転車号」／右下:リサーチ風景

●プロフィール

あさみとサンドロによるアーティストデュオ。主にペルーのスタジオを拠点として、ワークショップ等を開きながらそれぞれアーティスト活動を行う。

●滞在期間

2023 年 10 月 19 日(木)～12 月 5 日(火)
合計 48 日間

●活動内容

頭上運搬のスタイルで始まり昭和期には自転車(実用車)での販売スタイルに移行した「いただきさん」をリサーチ。地元の自転車屋の協力を得て制作した「ちうあこ横付け自転車号」で市内各所を巡り、その成果を展示した。

●ワークショップ「ボロ人形作っちゃおうの会」

作家がペルーや日本で定期的に行ってきた「ボロ人形作っちゃおうの会」を高松市内4カ所で開催。通常は思い入れがあれども使用できない古着や古布を参加者が持参し、好きな形の人形を作り、持ち主との新たな時間を刻むワークショップだが、今回は自由参加制としたため、拠点となったうみまち商店街の一角で古着古布の募集も行った。

@うみまち商店街
2023 年 10 月 29 日(日)

@屋島山上交流拠点施設やしまーる
2023 年 11 月 3 日(金・祝) 14 時～16 時
11 月 4 日(土) 14 時～16 時
11 月 5 日(日) 10 時～12 時

@塩江美術館
2023 年 11 月 18 日(土) 11 時～13 時

@高松市美術館 市民ギャラリー
2023 年 12 月 2 日(土) 10 時～12 時、14 時～16 時
12 月 3 日(日) 10 時～12 時

定員: 各回 5 名程度

●成果発表展「イトヨリつむぐ momento」

滞在中やワークショップで制作したボロ人形でデコレーションしたオリジナル横付け自転車で、実際に市内各地を走行、移動。行く先々でワークショップを開催し、その活動の記録を展示。

2023 年 11 月 28 日(火)～12 月 3 日(日)
9 時 30 分～17 時(最終日は 15 時まで)
@高松市美術館 市民ギャラリー及びエントランス前

●活動を振りかえって

2023 年を締めくくる形で、アーティストデュオとして高松AIRに参加した。

その場/その時、地域等のキーワードを加えプロジェクトを考えた時、移動式ワークショップのイメージが一番に思い浮かんだのは、ワークショップと共に広げてきたペルーでの活動が大きかった。そこで、高松市内での魚の行商「いただきさん」のスタイルに準え、オリジナル横付け自転車を制作した。魚ではなくアートを運ぶ!というイメージを膨らませ、実際に市内を走行し各所でワークショップ開催を試みる。

雨風や坂道の登り下り、相当辛かった場面もあった。

その分、アートというよりスポーツのような達成感らしきものが生まれ、(それはそれで複雑な気持ちながら…)地域で協力してくれた方々の理解と面白さに繋がったのではないだろうか。



制作した衣装

左上:リサーチ風景／右上:「土地の記憶が歩く街」展示風景／左下:公開制作風景

●プロフィール

演劇をつくる団体。主に既存の小説・戯曲を原案に置き、身体的な生理と発話される言葉を際立たせた作品づくりを行う。多様な領域で活動するメンバーが、それぞれのフィールドで得た視点を持ち寄り、協働によってアウトプットを形成する、ゆるやかなコレクティブ。高松AIRIには永瀬泰生(俳優・衣装家)と三浦雨林(演出家・写真家)が参加。

●滞在期間

2024 年 1 月 8 日(月・祝)～1 月 29 日(月)
合計 22 日間

●活動内容

高松で「行為が誘引される場所(座りたくなる建物のへり、よじ登りたくなる建造物、もたれかかりたくなる塀など)」をリサーチし、その意匠や造形から制作を行った。

●成果発表展「土地の記憶が歩く街」

滞在中に制作した高松をテーマにした衣装展示のほか、滞在中は衣装の公開制作や創作プロセスを公開し、最終日には仮面パレードを開催。

2024 年 1 月 25 日(木)～1 月 28 日(日)
12 時～19 時
@多目的交流施設「Smile's」

●ワークショップ「街の顔をつくる」

商店街を歩き、アクションを起こしたくなる場所を顔に見立てて、仮面を作った。
希望者は展覧会最終日の仮面パレードに参加した。

2024 年 1 月 16 日(火)～1 月 28 日(日)
(19 日(金)、20 日(土)、24 日(水)を除く)
各日 14 時～、17 時～(28 日(日)のみ 12 時～)
@多目的交流施設「Smile's」
参加費:500 円

●活動を振り返って

本企画では隣屋の永瀬・三浦両名が“身体が呼びかけられ、行為が誘引される場所”をリサーチし、その場が持つ誘引するエネルギーを人間が着るための衣装・写真・映像作品として制作した。商店街に乱雑に置かれた5つのイス、ランニングの折り返し地点となっている灯台、同じ場所にポイ捨てされた大量の同じ銘柄のビール。それらは人と土地、相互に発せられる誘引するエネルギーの絡み合いによって起こっている事象と考える。しかし身体性が喪失し、均一化されたまちで生活することに慣れてしまった現代人は、単に「機能や役割」としての眼差ししかまちへ向けられず、自分だけが誘引される場所への感受性がますます失われていると想像する。そこで本企画を通して、今まで意識することのなかった(あるいは失われていた)見慣れた土地と出会い直し、新しい高松の魅力が発見され、街が多面的に浮かび上がることを目指した。



「TEATER BATU テアトル バトゥ ～石の劇場～」公演風景 撮影:田中美句登

●プロフィール

インドネシアでジャワ伝統音楽であるガムランを学ぶ。現在は岡山県でジャワガムラン教室を主宰し、インドネシアの伝統音楽や文化の指導にあたるとともに、音楽家としてさまざまな場所での演奏やワークショップを開催。

●滞在期間

2024 年 11 月 12 日(火)～2025 年 2 月 24 日(月・振休)
うち合計 58 日間

●活動内容

牟礼や庵治を拠点に、庵礼西国三十三観音巡拝と庵礼二十四輩巡拝に関するリサーチや地元石材所など地域の人々のネットワーク、また坂出市で出会ったインドネシア人との交流をもとに成果発表公演を行った。

●交流会

岩本が所属する「ほのぼのオールスターズ」と坂出市で出会った「ASWATUL MUHAJIRIN」が互いにパフォーマンスを行い、交流を深めた。

2025 年 1 月 19 日(日)
@ほのぼのワークハウス

●ワークショップ「庵治石で音遊び」

やしまーの屋根瓦(庵治石)を使って、音を出し、合奏したほか、会場を回遊しながらいろいろな場所で音の響きを味わった。希望者は公演本番にも出演。

2025 年 1 月 19 日(日)14 時～15 時 30 分
@屋島山上交流拠点施設 やしまーる
対象:小学生～大人(小学生は要保護者同伴)
定員:30 名



左上:「TEATER BATU テアトル バトゥ ～石の劇場～」の出演者たち/右上:ワークショップ風景/左下・右下「TEATER BATU テアトル バトゥ ～石の劇場～」公演風景 撮影(右下のみ):田中美句登

●成果発表公演

「TEATER BATU テアトル バトゥ ～石の劇場～」
庵治石やサヌカイトでできた石楽器などを使い、ダンサーや地元の音楽家、ワークショップ参加者たちとともに、やしまーの建物内を移動しながらパフォーマンスを行い、高松でのリサーチをもとに岩本が作詞・作曲した「Lagu Teater Batu」を演奏した。

2025 年 2 月 23 日(日・祝) 14 時～15 時
@屋島山上交流拠点施設 やしまーる
出演:岩本象一、ワークショップ参加者の皆さん、藤本渉、yummy dance、國井類、中山忠彦、ほのぼのオールスターズ、ASWATUL MUHAJIRIN

●活動を振り返って

トータルで2ヶ月足らずの滞在だったがその中で沢山のひとと出会い会話を重ね多くのことを学んだ。庵治牟礼の歴史、信仰、山奥の石仏を代々守る人たちとの会話。また、商工会議所、石屋、本屋、居酒屋、バー、ライブハウス、喫茶店、福祉作業所、イスラム寺院、様々な場所で交わした会話が数珠繋ぎのように作品の着想となり根底にある。作品発表では出演者と観客の境界線が曖昧になり、音と動きを結節点とした多種多様な人々が響き合う場を生み出せたと思う。
本レジデンスの発表(2005年2月)以降、夏の参院選前後から俄かに排外主義、外国人差別を助長する言動が日本を覆った。人はいつの間にかそういった風潮に絡め取られていく。本作品がささやかでもそういった空気へ抗う一助となるのか。音楽家として再び自分に問いたい。本レジデンスで生まれたご縁は小さいが確かにまだ続いている。作品を通して蒔いた種がいずれあちこちで芽吹くことを願ってやまない。



ワークショップで制作した作品で構成された《水の脈をとどめる》撮影：田中美句登

●プロフィール

1993年京都生まれ。土地の独自性や人が自然とともに生きていることに興味を持ち、主にプラスチックの板と石膏を用いた版画作品に取り組んでいる。

●滞在期間

2024 年 9 月 2 日(月)～2025 年 2 月 28 日(金)
うち合計 70 日間

●活動内容

香川用水資料館や香川用水記念公園、その他高松市内の川やため池を訪れ、高松を流れる水や、それを取り巻く人々の生活に着目しながらリサーチを行い、ワークショップや成果発表展を開催した。

●ワークショップ「水の脈をとどめる」

高松の池や川の風景を、プラスチックの板にスケッチし、石膏に写し取ってレリーフ状の作品を作った。
制作した作品は成果発表展にて展示後、返却。

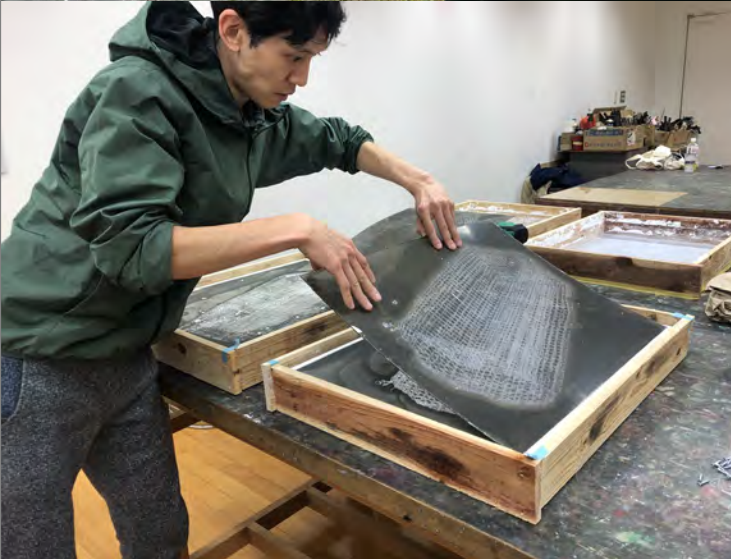
2024 年 11 月 23 日(土・祝)@三郎池自然公園、彫刻家の家
11 月 24 日(日)@奈良須池、高松市美術館 講座室 1
11 月 30 日(土)@うみまち商店街
12 月 7 日(土)@塩江美術館
12 月 8 日(日)@新川、前田コミュニティセンター

対象：小学 3 年生～大人(小学生は要保護者同伴)
定員：各回 8 名
材料費：500 円

●オープンスタジオ

ワークショップで制作した版をプレス機で紙に刷る工程を公開した。

2025 年 1 月 25 日(土)、1 月 26 日(日)
各日 10 時～16 時 30 分
@高松市美術館 講座室 1



左上：ワークショップ風景／右上：《水の道》／左下：制作風景／右下：「水の脈をとどめる」展示風景 撮影(右上・右下)：田中美句登

●成果発表展「水の脈をとどめる」

ワークショップの参加者が制作した石膏作品、オープンスタジオで刷った紙作品や高松でのリサーチをもとに西村が制作した石膏作品や銅版画を展示。

(第 1 期)
2025 年 2 月 4 日(火)～2 月 9 日(日)
9 時 30 分～17 時(ただし、金・土は 19 時まで、日は 15 時まで)
@高松市美術館 市民ギャラリー

(第 2 期)
2025 年 2 月 14 日(金)～2 月 23 日(日) 金～日のみ開廊
金・土 10 時～17 時、日 10 時～15 時
@SICS サステナブルラウンジ(うみまち商店街内)

【トークイベント】

制作や出品作品についてのトーク。

2025 年 2 月 8 日(土)11 時～12 時
@高松市美術館 市民ギャラリー
ゲスト：岩本象一

●活動を振り返って

私が生まれた京都には地下の水脈や汲み上げた取水場、荷物運搬用の疎水といった水に関する文化が多くあります。私にとってこれらの文化は距離感が近すぎて、作品にするには抵抗がありました。

今回の高松滞在で出会った人から話を聞いた中で、殆どの人が香川の生活と水との密接な関係について話してくれたことに驚きました。それは私自身が作品を制作するようになってから京都の水に関する歴史、文化を知ったからです。それだけ無意識下に水が高松の人たちと文化を結びつけているのだと思いました。このような背景で今回の滞在制作では水をモチーフにした作品を制作しました。

メインの作品は地元の人たちとワークショップで作ったもので、溜池とそこから流れ出た川と海をモチーフにしました。その他に高松の古墳塚にある石棺、溜池横にあった浴槽、リサーチで訪れた水に関する風景やモチーフの小作品などを制作して、あらゆる角度から高松の文化を再発見できるように試みました。



「まつとしきかば今はちあわせ」展示風景 撮影：田中美句登

●作家プロフィール

大学卒業の頃より占いによる制作活動を開始。予備校での古文講師の仕事や地球儀加工のアルバイトなどをしながら、「病院・刑務所・墓場に行き場がないものたちの管理人」の肩書で独自の占いによる制作・発表活動を行っている。

●滞在期間

2024 年 10 月 29 日(火)～2025 年 2 月 24 日(月・振休)
うち合計 44 日間

●活動内容

高松の地名から「松・待つ・待ち・街」の掛詞をもとに、滞在中に占った内容を参照しながら活動を展開。偶然出会った人や見た景色、知った情報を結び付けながら、成果発表展を開催した。

●占いワークショップ

「水瓶座新月の日、
重なり合うタロットカードを作って占ってみる！」
透明のカードにイメージを描いて参加者全員で1つのタロットデッキを作り、重なり合うカードの複数の線越しに見えてくるイメージを読みながら、水瓶座新月の下、さまざまなことを占った。

2025 年 1 月 29 日(水)18 時～20 時 30 分
@瓦町 FLAG 8 階 アートステーション クリエイティブルーム
定員：8 名



左上：《乗合せ映像三部作 高松》／右上：「まつとしきかば今はちあわせ」展示風景／左下：占いワークショップ風景／右下：《サンドピクチャー 松・待つ・待ち・街》撮影（左上・右下）：田中美句登

●成果発表展「まつとしきかば今はちあわせ」

高松でのリサーチ中に撮影した写真や映像によるインスタレーションや、リサーチ先で収集した素材で制作したサンドピクチャーなどを展示。第1期では会場に在廊し、公開制作を行った。

(第1期)
2025 年 1 月 25 日(土)～2 月 2 日(日) 13 時～21 時
@CENTER/SANUKI 1ドリンクオーダー制

(第2期)
2025 年 2 月 15 日(土)～2 月 23 日(日・祝)
13 時～18 時(初日のみ 20 時まで) @Syndicate

【トークイベント】

これまでの制作や高松での滞在・制作に関するトーク。
2025 年 2 月 15 日(土)14 時～15 時
ゲスト：戸舘正史(港区立みなと芸術センター参与、高松AIR2024 選考委員)

●活動を振り返って

「松・待つ・待ち・街」の掛詞をとっかかりに高松を訪れましたが、最初はどうなるのか全くわからない状態でした。滞在を通して、松の剪定、古典にみられる調伏、島や商店街で鉢合わせた野良猫たちや占いで出会った方々に教えてもらったことなどが繋がっていき、指針となりました。待つのが吉でした。
展示においては、盆栽のように作品の「世話」をしていくことが、このレジデンスを通して辿り着いた大切なテーマだったので、作品の手入れを良しとしました。これを機に、理想的な作品の在り方について再考するようになり、今は「流れ星や野良猫のように見れたらラッキーだが見えないからといってアンラッキーというわけではないような鑑賞体験」の実現を目標に制作を続けています。高松で鉢合わせた沢山の物事について、自分のもとの留めないようにしながら、大切にしていきたいです。

「地域に飛び出したAIR」

「高松アーティスト・イン・レジデンス」(以下「高松AIR」という。)がスタートして、早や10年が経過した。この間、20組(うち海外2組)のアーティストが、本市の様々な地域に滞在し、そこでの交流を通して創作活動やプログラムを展開してくれた。ここで「様々な地域に滞在」という言葉を使ったが、本市では特定の創作場所や滞在施設を有しておらず、それに頼らないAIRの仕組みづくりが、準備段階での大きな課題であり、何よりも「場がないAIR」をアーティストがどのように受け入れてくれるのかが、一番の気がかりな点であった。

そこで、AIR事業の事例調査を進めながら、アーティストや先進地の担当者の生の声も聴き取り、結局のところ「場がないなら、地域に飛び出してみよう」ということになった。実は、AIRごとに特定の施設、例えば、閉校となった小学校や商店街の空き店舗等を事前に設定する考えもあったが、アーティストが「高松のどのような場所に魅力を感じてくれるか」という点を期待し、創作や滞在に関する場所は、アーティストが自由に選べるようにし、事務局がそれをサポートすることとした。また、滞在期間中に地域での交流事業を展開することも条件に加えた。これはアーティストが、地域やそこに暮らす人々とアートを結び付け、交流を生み出す可能性を期待してのことであった。このように高松AIRは、アーティストが地域に身を置き、創作のみならず交流も前提とした「場の選定から始まるAIR」となったのである。

これらは現在も受け継がれており、AIR担当者が参加アーティストと共に地域をめぐりながら、創作や滞在場所の選定をサポートしている。また、作品制作費とは別に滞在費(上限50万円)を支給できるようにしており、アーティストの創作活動や地域交流に便利な場所で、ウィークリーマンション等を賃借できる仕組みになっている。この仕組みは、良く言えば「アーティストの自由度を優先」、悪く言えば「アーティスト任せ」と捉えられるかも知れないが、結果として彼らは、我々の想像を超えた「場」を数多く見出してくれた。ある時は、電車や田園の中で。またある時は、瀬戸内海の島々で。またある時は、門前町を舞台として、、、そこには我々が気付かなかった高松の魅力が秘められていた。

今振り返ってみると、アーティストと共に地域に飛び出した経験は、私にとって代え難いものとなった。彼らの場の選定や創作活動等へのサポートが十分であったかは自信がないが、その過程において一緒に歩き、見た風景は今でも忘れない。そしてこの経験は、AIR事業が作品発表や公演開催といった成果のみを重視するのではなく、その過程がいかに大切であるかを教えてくれ、また同時に、地域資源を活用した文化芸術活動の具体的な手法と、その将来的な可能性を確認することに繋がったといえる。

今回の活動記録集は、高松AIRの参加アーティストが見出した「場」での創作活動や地域交流の数々を振り返るものである。ここで改めて、過去20組のアーティストとその活動を支えてくださった全ての皆様に、心から感謝と御礼を申しあげたい。

そして最後に、これからもAIR担当者がアーティストと共に地域に飛び出して、同じ風景や想いを共有できることを切に願って、筆を置きたい。

高松市創造都市推進局長 次田 吉治

「高松アーティスト・イン・レジデンス 活動記録集 2015→2025」

2026 年 1 月

表紙デザイン 有限会社デジタルモリス

発行

高松市 創造都市推進局 文化・観光・スポーツ部 文化芸術振興課

〒760-8571 高松市番町一丁目8番15号

TEL:087-839-2636 / FAX:087-839-2659

E-mail:bunka@city.takamatsu.lg.jp

本プログラムの開催及び本活動記録集発行にあたり、
ご協力いただきましたすべての方に深く感謝し、心よりお礼申し上げます。

